

エゼキエル書11章16-20節 「新しい心」

1A 外国での聖所 16

2A 約束の地への帰還 17

3A 肉の心 18-19

1B 御霊による一新 18

2B 御言葉への従順 19

本文

エゼキエル書 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、9 章まで来ましたが、午後には 10 章と 11 章を読みます。今朝は、11 章 16-20 節に注目します。「16 それゆえ言え。『神である主はこう仰せられる。わたしは彼らを遠く異邦の民の中へ移し、国々の中に散らした。しかし、わたしは彼らが行ったその国々で、しばらくの間、彼らの聖所となっていた。』17 それゆえ言え。『神である主はこう仰せられる。わたしはあなたがたを、国々の民のうちから集め、あなたがたが散らされていた国々からあなたがたを連れ戻し、イスラエルの地をあなたがたに与える。』18 彼らがそこに来るとき、すべての忌むべきもの、すべての忌みきらうべきものをそこから取り除こう。19 わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。20 それは、彼らがわたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行なうためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」

私たちの教会で、二年ほど前に、「ナスラニ」という T シャツなどを購入する呼びかけを行ないました。アラビア語で N を表す印が付いているもので、多くの方が持っていると思いますが、それは「ナザレ人」つまり、キリスト者を表すアラビア語の言葉「ナスラニ(Nasrani)」の頭文字です。これは、二年以上前、イスラム国がイラクから台頭してその地域を支配、シリアにまで支配した時に、避難していったイラク人のキリスト者と連帯する、心と思いを一つにしたい目的で、その印を付けています。その印は、イスラム国がキリスト教徒の家々の入口のところに付けて、その中のものはどれだけ奪い取っても良いことにしていました。まさに、民族浄化ならず、キリスト教徒浄化を行っていたのです。しかし、その忌まわしい印を私たちがむしろ身に着けることによって、キリストの体の苦しみを負う、というものでした。この T シャツの購入資金を使って、サマリタンズ・パースという援助団体によって、実際に避難民を助けます。

故郷を追われて、避難所にいるイラク人キリスト教徒の中には、習慣的に教会に行っていたけれども、難民キャンプにおいて神さまを真剣に求めて、それでイエス様との本当に出会いをすることができたという少女の証しがあります。そして他の 10 歳の少女で、「ミリアムちゃん」という子が

有名です。彼女は、神は全ての人を愛しておられるから、自分たちの生活を脅かしたイスラム国の人々を神が赦してくださるように祈っている、と言いました。¹

そして今、ついに、イラク軍、クルド人のペルシェルが、そして有志連合が、イラク第二の都市モスル奪還のために本格的な戦争を開始しました。その近郊の町々を次々とイスラム国から解放していています。そして感動的だったのは、キリスト教徒が二千年近く住んできた町「バルテラ」が解放された時のことです。キリスト者の兵士たちが喜びに溢れ、そこにある材木で十字架を作り、破壊された教会堂の中に入って、ひざまずいて祈りを捧げていました。²そして先ほどのミリアムちゃんの家族のニュースも入りました。自分たちの町、カラコシュが解放されて戻れる日が近づいていることを感じて、待ち遠しくてたまらないと言っています。³

このようにして、自分たちの故郷を離れるのを余儀なくされたけれども、その離れているところで主を信じ、この方に祈り、そこが主にお会いできるところとなりました。けれども、彼らは再び故郷に戻ることができます。このような計画を、主は、エルサレムから出ていくのを余儀なくされたユダヤ人たちに用意されていました。彼らは捕え移された外国の地において、主が彼らに小さな聖所となってくれます。そして、イスラエルの地に帰還することも約束してくださっています。そして何よりも、彼らの心が変わられて、神ご自身の御霊によって新しくされて、石のような心だったのが、肉の心にするのを神は約束してくださいました。

1A 外国での聖所 16

16 節の後半を見てください。「しかし、わたしは彼らが行ったその国々で、しばらくの間、彼らの聖所となっていた。」とあります。自分たちの罪のゆえに、彼らは約束の地から引き抜かれてしまいました。けれども、主は憐れんでくださり、その外国の地でご自身に会えるようにしてくださいました。外国の地にいますが、それでも主は聖所、つまり主に出会えるところを造ってくださっているのです。

実は、彼らの父祖であり、また私たちキリスト者の信仰の父でもあるアブラハムは、同じように自分のいるところは外国の地であることを告白しました。「ヘブル 11:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」アブラハムは、主によってカナンの地を与えると約束されました。けれども、そこにおいては天幕生活であり、唯一、自分の所有となったところは、サラを葬るために購入したマクベラの墓地でした。彼が信仰によって生きていたので、約束は受け取っていたものの、まだ実現していない状態で、自分は地上におい

¹ <http://www.christiantoday.co.jp/articles/15388/20150221/islamic-state-christian-girls-forgive.htm>

² <http://www.france24.com/en/20161023-video-iraqi-troops-liberate-christian-town-bartella>

³ <http://www.christiantoday.co.jp/articles/22470/20161101/young-iraqi-christian-girl-joyful-about-returning-home.htm>

ては旅人であり、寄留者であることを告白していました。

キリスト者の「国籍は天にあります。(ピリピ 3:20)」とありますね。私たちが住んでいるところが、どうしても自分には合わないという違和感がいつも存在します。例えば、キリスト者は性的な欲求は結婚の中において祝福されると信じています。けれども、このことを世に発信すれば、たちまちおかしい人だと思われてしまうことでしょう。若い人たち、特にクリスチャンの女性が、付き合っている時に性的な行為を迫られるそのプレッシャーは、ひとたまりもなく大きいという話が、先日の教会のリーダーたちの修養会の交わりで出てきていました。他にも数多く、「自分はここには属していない。」と、距離感(アウェイ感)を抱いてしまうようなことはとても多いです。それは、私たちが既にこの地上が外国になってしまったからです。地上にはもちろん日本国籍があり、旅券も日本のものを持っているのですが、しかしここが自分の全てではないという思いがいつもあります。

しかし、自分が「私はここに属しているのだ」とはっきりと、心から言えるところがあります。それが、霊とまことをもって主を礼拝する場そのものです。キリストを王として心を明け渡し、心から賛美を歌い、自分の財産を捧げ、御言葉を一心に行くその時、また他の信仰者と語り合い、交わり、時間を過ごすその時、自分はここに存在している、自分の居場所がここにあると感ずることでしょう。この自由を大事にしてください。キリストを頭とするからだを大事にしてください。なぜなら、主は御霊によって、自分の属している天の前味を楽しませてくださっているからです。

自由というのは、いつの間にか自動的に与えられるものではありません。しっかりと守っていくもの、大事にしていくものです。犠牲が伴います。パウロは、「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。(ガラテヤ5:1)」と言いました。私たちの周りには、「これこれをしなればいけない」というプレッシャーがとてつもなく押し寄せてきます。それは、自分の肉の欲であるかもしれないし、そして多くが良いことであるのです。自分を何かに駆り立たせて、「これこれをしなればいけない」とさせて、自分のまことの住まいである主ご自身のところに来るのをやめるなら、自分の奴隷の頸木を負わせているのです。ある方が自分のお父様のことを話してくださいました。既に九十歳代です。けれども、「自分は忙しい」と呟きます。分別ごみを出すのに忙しいのだ、と言います！主ご自身のところに来るのを拒むのに、私たちはあらゆることをして、自ら来ないようにさせます。しかし私たちは、地上に属しているのであればありません、天に属しています。

2A 約束の地への帰還 17

そして 17 節には、「わたしはあなたがたを、国々の民のうちから集め、あなたがたが散らされていた国々からあなたがたを連れ戻し、イスラエルの地をあなたがたに与える。」とあります。捕え移された彼らがイスラエルの地に戻ります。私たち天を国籍とする者たちは、主のおられる天に引き上げられます。そして、ご自分を王として全てを変えられた、この地に、この方と共に戻ってきます。

使徒パウロが言いました。「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。(ローマ 8:21)」アダムが罪を犯したために、地が呪われたものとなりました。しかし、十字架に付けられ罪を取り除かれ、そして甦られた主は、この世界そのものからも罪の呪いを取り除かれます。そのエデンの園のようなところを、主は私たちに与えて、住ませてくださるのです。その時に私たちも、回復したユダヤ人と共に、「約束のところに戻ってきた」ということができるでしょう。

今は、紅葉の季節になりました。先週の修養会、リトリートにおいて、きれいな奥多摩の自然を露天風呂から見ることができました。主はご自分の栄光と美を自然の中で見せてくださっています。しかし、そのような美しい自然があると同時に、天災があり、人災もあり、また動物界では弱肉強食があり、そして私たちの生活と社会がどうしても贖われているとは思えません。交通事故は起こるし、凶悪な犯罪はあるし、安心して暮らしているとは言いにくい社会です。そして陰湿なのは、自殺です。人の精神を徐々に蝕む、社会の軋轢があります。しかし主は、そうした曲がった世をまっすぐに直されます。私たちはそれまで、熱心に主の来られるのを待ち、主のわざに励みます。

3A 肉の心 18-19

そして、18 節に大きな約束が書かれています。「わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。」イスラエルの民は、主に命じられていることをことごとく破りました。そして、主がしてはいけないと言われているのに、頑なにそれを拒みました。それゆえエルサレムを破壊されて、約束の地から引き抜かれました。その石のような心を主ご自身が取り除いてくださる日が来ます。そして、聖霊が教会に降り注がれた今、イエス様に救いを求め、信じる人には御霊を与えられ、その人の心が一新します。「テトス 3:5-6 神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」

私たち人間の問題は、「変えようとしなない頑なな心」です。自分がやりたいことについて、それを変えなさいと言われても、それを何としてでも変えない心であります。神が罪であるからやめなさい、と命じられても、それでもやめない心です。それが石のようなものであると、主は言われます。私たちが聖書を読むと、主がまるで恐ろしく、厳しい方のように見えます。彼らの罪を明らかにするその言葉は、「そこまで言わなくてもよいのに。」と思うことがあります。しかし、それは間違いです。私たちは一方の手紙は読んでいるのですが、実際にその読んだ人たちの言葉は読んでいないので、そう思ってしまいます。あるテレビ番組で、「こんなに騒ぎ立てている人がいる、酷いなあ。」と思っていたら、実はそれだけ騒ぎ立てるだけのことをしている問題を引き起こしている人がいるから、騒いでいたのだということがあります。聖書でも、罪を何度も指摘している神の言葉を読んでい

ると、そのような誤った印象を抱いてしまっているんですね。しかし、人々があまりにも頑なであり、それでもあきらめずに語っておられるのです。強いてそれをやめさせることができないので、懇願していると言ったほうがよいでしょう。主が懇願して、罪を捨てるべく呼びかけておられます。それでも、頑固に拒みます。

そこで主は、もはや石の板の律法ではなく、心の中に書き記すと言われました。「エレミヤ 31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。・主の御告げ。・わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」心が堅いので、どんなに命令を受けてそれを守ることができなくなってしまっています。ですから、主はご自分の霊によって人の心を変え、内側から新しくしてくださいます。そして、その新しい心によって、主の命令に聞き従うことができるようにしてくださいました。それは、もはや規則に従うような従順ではありません。律法のように従うではありません。むしろ愛の律法によるものです。イエス様との関係、愛の関係によって支えられている従順です。それが、石の心ではなく、肉の心によって主の命令を守ることです。

主は、人が愛によってご自分の命令を守ることが願っておられます。そして、強いられて守り、それが重荷になることを願っておられません。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。(1ヨハネ 5:3)」私たちの内におられる聖霊が、神の愛を示し、それゆえそのすばらしさのゆえに、神に従うことが重荷とはならなくなります。

ギリシヤ神話の喩えがあります。ユリシーズは冒険家でした。旅の途中に、地中海に浮かぶ島の話の聞きませ。そこにいる恐ろしいほど魅惑的な魔女が、世にも美しい音楽を奏するので、その島の近くを通る水夫たちは必ず、船を島の沖に向けて、船を座礁に乗り上げさせて難破させてしまうそうです。その魔女の歌を聞いて生還した人はいないそうです。それで、ユリシーズはこの挑戦に受けて立ちました。そのためにかれは、船員たちの耳にロウを入れて耳栓をさせ、自分自身は船のマストに固く括り付けるように命じました。そしてその島を過ぎた辺りで、魅惑的な音楽が始まりました。彼は自分を縛っている縄を解こうともがきました。船員たちに、その島に向かうように狂ったように叫ぶのですが、船員は耳栓をしているのでその叫びが聞こえません。その区域から船が出て、安全なところまで行くまで、自分を縛り付けている縄と格闘したそうです。

ところがもう一つの神話には、船の人々が生還したもう一つの話があります。船員たちが、その音楽に引き寄せられて浅瀬に帆先を進めてしまっている時に、船に乗っていたオルペウスは、豎琴を取り出し、奏で始めました。その島からの音楽よりはるかにすばらしかったので、船員たちはその帆先を変えて、難破の危機を脱したとのこと。その新しい絶妙な音にうっとりとなりながら、それで安全なところに航行をしました。

私たちが、誘惑を受ける時にユリシーズになっているか、それともオルペウスの奏でる音楽を聴いているか？という違いであります。私たちが、神の命令を守る時に律法を守るように、規則を守るように守ろうとするのであれば、もしかしたらその誘惑に勝てるかもしれません。しかし、本当に勝っているかと言えばそうではなく、無理やり、強制力によってやっていなかっただけです。しかし、新しい御霊によって神の愛を知って、その愛に満たされているならば、自然とその誘惑になっていたものが誘惑にならなくなっていくます。その逆に、主との関係が律法のようにになっている時には、肉の力に対して、その誘惑に対してもがいてしまうのです。主の与えられる喜び、聖霊の喜びこそが私たちが罪から引き離す力を持っています。

ですから 20 節になります。「それは、彼らがわたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行なうためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」主の定めを、新しい心で守り行なうことができます。それは、「彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神」つまり、神が自分の個人的な方になっている、人格的な関わりを持つ方になっている、ということです。私たちは、御霊による新しい誕生によって、また特別な聖霊の働きによって、心の態度が新しくされた人々を知っています。教会においても、それを目撃します。ある時に、「あれって、彼が(あるいは、彼女が)こんなに違うのは何なの？」と思うぐらい、態度が柔和になり、優しくなり、愛がある、そしてそこに偽りがないことがあります。平安に心が支配されている姿があります。それらが、作られたものではないことは、明らかです。御霊によって肉の心にしていただいたのです。

私もそうですが、とかく、「何をするのか？」ということが、私の生活の中心になってしまっています。しかし、本来ならば「どこに留まっているのか」が中心になっていなければなりません。自分の心がどこにあるのか、何を愛しているのか、そうした心をもっと大事にしないとイケません。イエス様は、「わたしに留まれば、多くの実を結ぶ」と言われました。自分の愛している方との時間を過ごしましょう。そうすれば、自ずと何をすれば分かるようになり、また自ずとそれをしたいと強く願うようになり、行なっている自分に気づきます。